

現地ルポルタージュ

イタリアの倫理銀行 (Banca Etica)

一、はじめに

イタリアの倫理銀行は、その業務を通じて地域社会や環境問題に貢献するというユニークな取り組みを行う銀行である。二〇〇二年九月に同行を訪問する機会を得たので、その取り組みについて紹介したい。

二、歴史的経緯

倫理銀行が設立される以前、イタリアではMAGという協同組合が組合員から資金を集め、それを社会的なプロジェクトを提案している人や組織に対して貸し付けていた。しかし、九〇年代初めに法制度が変更され、広く一般から預金を集めるためには、銀行として認可されることが必要となった。そのため、九四年十二月に二十二の組織が銀行の設立に向けてアソシエーションを作った。九五年に、このアソシエーションは、銀行の設立に必要な六五〇万ユーロの出資金を集めるための協同組合に転換された。そして三年間、出資金集めのキャンペーンを行った後、一九九八年五月に倫理銀行として設立され、翌年二月に業務を開始した。

これにより倫理銀行は、イタリアで社会的な目的をもつ組織への貸出を専門に行う初めての、そして唯一の銀行となった。

三、業務内容

倫理銀行は、法律上は人民銀行 (Banca Popolare、協同組合系金融機関の一種で組合員は一人一票制) の一つである。業務の内容は、一般の銀行と同じであり、預金の受入、貸出、クレジットカードの発行などを行っている。預金の預け入れは、組合員でなくても可能だが、クレジットカードや公共料金の引き落とし、貸出は組合員向けにしか行っていない。

組合員になるためには書類を提出して審査を受ける必要がある。審査には約二ヶ月かかるが、それにパスすれば一口五一・六四ユーロの出資を五口行う。

現在、倫理銀行の支店は、ミラノ、ローマ、ブレシャ等の五都市にしかないが、預金の預け入れは、提携四〇行からも行うことができる。設立当初の職員数はわずか五人であったが、現在では約六〇人の職員が業務を行っている。

四、倫理銀行の独自性

倫理銀行が貸出を行う分野は、①社会的協同、②国際的な協同、③環境、④文化と市民社会の四つに限られている。

それぞれの例を示すと、①社会的な協同には、障害をもつ人を社会や労働市場に参

画させたり、生活の質を改善したりするための取り組み等がある。②国際的な協同には、公正な貿易のサポートや、発展途上国の組織との協力を行うもの等、③環境には代替的・再生可能なエネルギー資源の調査・実験、バイオロジカルな農業の発展、環境に配慮した交通手段等が含まれる。④文化と市民社会には、伝統文化の保存、貧しい地域での雇用創出や住居の提供、社会的なツリーズムの振興等がある。

倫理銀行の貸出先は、これらの四分野で活動する組織に限定される。組織形態としては、協同組合、アソシエーション等が中心であり、営利企業は対象としない。

預金者は、希望すれば自分の預金をこれから四つの分野のうち、どの分野への融資にまわすかを決めることができ、さらに預金金利を上限からゼロの間で選択することも可能である。もし金利をゼロあるいは低めにすることを選択すると、その人は経済的なメリットを放棄するかわりに、社会的な目的をもつ組織の活動を発展させることに貢献することができるのである。

倫理銀行では、融資の申込みがくると、まずその組織について社会的な側面の審査を行い、それをパスしたものについては経済面の審査を行う。

社会的な側面については、組合員が県ごとに組織しているソーシヤルネットが審査を担当する。各地域にはそれぞれ特性があるので、その地域の状況がわかっている人

に審査を任せるといふ考え方である。ソーシャルネットの構成員は、融資を申し込んできた組織について、民主的な運営が行われているか、活動は環境や人権を守るものであるか、労働者の権利が保護されているか、経営の透明性があるか等、九つの試験的な基準によって審査を行う。ネットの構成員は、ボランティアで活動に参加しており、倫理銀行はこれらの人々を対象に審査を行うための講座を開催している。

続く経済面での審査は、倫理銀行の審査部門が行うが、その審査方法は一般の銀行と同様である。審査は、倫理銀行で働く以前に一般の銀行での審査経験を持つ職員が担当している。法律で定められているため、融資には担保が必要であるが、こうした物質的な担保に加え、借入者の仕事に対する意欲といったものも審査の基準としているということである。

五. 貸出の事例

具体的なイメージをもつため、いくつかの貸出事例を紹介しよう。イタリア南部のある小さな村では、六〇年代に三千人いた住民が六百人まで減少し、中心部の三〇％の家屋が無人となっていた。この村の若者達が設立したアソシエーションは、何とかして中心部の歴史的地区を復元し、古き時代の伝統や手仕事を復活させたいと考えていた。その第一歩として、二〇〇〇年に倫理銀行から借入を行い、中世の街並みが残る中心地区の住居を十一のホテルに改装し、

さらに古い水車場を紡績の作業場に転換した。これらは新たな雇用を生んだだけでなく、旅行者にこれまでとは違った観光の経験を提供する場ともなっている。

また、イタリアの有機農業のさきがけとなった農業協同組合は、廃墟となっていた七世紀の修道院を有機農産物生産センターに生まれかわらせた。ここでは有機農業、食料、薬草に関する研修活動や、公正な貿易、倫理的な金融についての情報を得ることができる。周辺にはミュージアムや農協が経営するレストランもつくられた。倫理銀行からの借入金は、建物の保存、改修に充てられた。

六. 展開

倫理銀行のこうした業務内容に共感をもつ人が増えているようであり、組合員数は、一九九九年十二月末の一万三、八五八人から二〇〇〇年末には一万五、二〇二人(前年比九・七％増)、二〇〇一年末には一万七、三七二人(同十四・三％増)と増加している。

預金残高も二〇〇〇年末の七、五三〇万ユーロから二〇〇一年末には一億二、三三〇万ユーロ(同六三・七％増)、貸出金残高は、四、六八〇万ユーロから六、四一〇万ユーロ(同三七・〇％増)にそれぞれ増加した。二〇〇二年九月時点では、預金は約二億ユーロ、貸出金は約八千万〜九千万ユーロに増加している。

同行では、預金集めは比較的容易である

としているが、一方の貸出は、預金の増加に追いついていない。その理由としては、貸出先の組織が効率性に欠ける面があり、書類の準備等で審査にも時間がかかること、また、審査担当者数は増やす予定であるが、あまり急激に業務を拡大せず、段階を踏もうとしていることが挙げられた。現時点では、貸出に関して一般の銀行と競合するような状況にはないとのことである。現在の貯貸率は四〇〜四五％程度であるが、これを早々に七〇％(流動性確保のため定められた上限)に引き上げたいとしている。貸出を除いた余裕金は、直接運用するのではなく、協同組合系金融機関の中央機関を通じて運用を行っている。倫理銀行によれば、同行の貸倒比率が％未満と低いことに、イタリア中央銀行も一般の銀行も関心ももち始めているとのことである。

倫理銀行に類似する取組みを行う銀行は、いくつかの国でもみられる。日本では、一九八九年に市民バンクが発足し、それ自身は銀行ではないが、信用組合と提携して市民の事業に対する融資を行っている。また、NPO法人の活動が活発化するにつれて、労働金庫がNPOへの融資制度をつくるなどの動きがでており、倫理銀行の業務は日本においても参考になる点が多いと考えられる。

(調査第一部 重頭ユカリ)